

石井十次の教育に学ぶ

石井記念友愛社理事長

児嶋草次郎

目次

はじめに

一 石井十次を生んだ高鍋の精神文化と教育

二 石井に根付いた精神文化

三 孤児教育への転身

四 救済事業の展開

五 石井十次の教育

おわりに

はじめに

今朝（平成二十一年五月十六日）、宮崎日日新聞を開いたら、二宮金次郎（尊徳）の報徳思想を取り上げていました。二宮金次郎は石井十次が最も尊敬していた人物の一人です。石井は、晩年、キリスト教と報徳思想を合体させて基徳教なるものを考えたりしています。

新聞によりますと、北京大学の劉金才教授が九二年に神奈川県小田原市にある「報徳博物館」を初めて訪れ、道徳と経済の融合を説くその思想に衝撃を受けます。二宮金次郎の思想は、近代日本経済発展の精神的原動力になったものであり発展途上の中国が学ばねばならないと氏は考え、その報徳思想について一生懸命勉強した。中国では、日本軍国主義と結びついた思想との見方も強い中で、急激な経済成長の狭間で荒廃する精神を憂えながら、この報徳思想の普及に地道に努めている、そんな内容です。

記者は次のように結んでいます。

「劉が『日本で花開いた究極の東洋思想』とまで評する報徳思想、二百年の時空を越え、経済危機の救世主となれるだろうか。」

二宮金次郎像は、戦前には日本の多くの小学校等の庭に立っていたそうですが、今ではほとんど見ることができなくなっています。石井十次も含めて、東洋的感性で精神文化を築いた先人を、多くの日本人が忘れ去ってしまっている現状を寂しく思いますし、二宮金次郎について中国人が再評価しようとしている話にショックを受けないわけにいきません。

今、日本では経済は停滞し格差社会となり、人々の心も個人主義に片寄りすぎてしまっているように感じます。我々日本人こそが、もう一度このような先人達が築き上げた精神文化を学び直さねばならない時にきているのではないのでしょうか。

一 石井十次を生んだ高鍋の精神文化と教育

石井十次が生まれたのは慶応元年（一八六五）、高鍋藩の下級武士の村、馬場原です。高鍋藩は、三万石の小さな国でした。



写真1 石井十次肖像

石井より百二十二年前に生まれたのが秋月種茂です。高鍋藩の七代目藩主となります。秋月家は元々今の福岡県甘木出身。豊臣秀吉の時代、抵抗して破れ高鍋に移封されたのです。福岡では三十六万石だったとか。種茂は非常に偉いお殿様でした。アメリカのケネディ大統領が日本で最も尊敬する人物としてあげたのが米澤藩の上杉鷹山だそうです。鷹山は実は種茂の八才下の弟で、米澤藩に養子に行ったのでした。高鍋の人に言わせれば鷹山は兄種茂の真似をしただけということになります。高鍋の三万石に比べると米澤は、十六万石で、どうしても大きい方が歴史には残るのです。

十七才で高鍋藩主として江戸より着任、最初にやったことが間引きの禁止です。一七六一年、当時農家は疲弊していて間引きが横行

していたそうです。禁止するだけだったら誰にでもできる。種茂は農家の子どもに対して支援をしました。三人目の子どもから米二合あるいは麦三合を支給した。世界で最初の児童扶養手当だという人もいます。それだけでなく、大坂から産婆さんを招聘して子どものお産あるいは育児についての指導にあたらせました。また、双子(当時双子を忌み嫌う風習があった)が生まれた場合にも扶助料を支給しています。

一七六一年という年にやったことがいかに先駆的なことなのか、世界の年表の中に置いてみると分かりやすいのですが、アメリカの独立宣言がそれから十五年後の一七七六年です。しかし、起草したトーマス・ジェファソン自身が奴隷を百人ほど抱えていたと言われており、当時はアメリカもイギリスも西洋先進国は、奴隷を牛馬のごとく扱っていました。独立宣言で人間は平等であると言っても、白人だけが平等であって黄色人種や黒人は部外者だったのです。そういう時代に日本の地方弱小国で先ほどのような福祉制度を作ったのです。ちなみに、弟の鷹山が同じような「生児愛育令」作ったのはそれから十年後です。

秋月種茂が理想とした国はどういう国かと言うと、道で物を拾ってもそれをポケットにいれる人がいない、外出するときに家の鍵を締めなくても泥棒が入らないというような国でした。そういう理想国を作るためには教育が必要であり、そのための学校として一七七八年、『明倫堂』という藩校を作りました。明倫とは人倫を明らかにするという意味です。この『明倫堂』は九十四年間ほど続き、一番最後の部分で学んだのが石井十次です。

石井十次は『明倫堂』で一年以上学んでいます。『明倫堂』で彼の人格の基礎が作られたと、私は捉えています。最初寺子屋で学び(明治二年)、六才の時(明治四年)『明倫堂』に入学します。国が変わっても明治五年十一月までは藩校『明倫堂』として活動していたのです。

この『明倫堂』が閉校になると十次は宮崎に新設された宮崎学校に転校します。どうも『明倫堂』の助教授をしていて宮崎学校に招聘された堤長発(つつみながあき)先生を追いかけて行ったようです。堤長発の伝記に十次の父親が十次を連れて転校させたいと頼みに来たという記述があります。父親としては、堤先生こそが明倫堂精神を体得した方であり、堤先生に息子を託さねば息子の将来は無いと考えたのではないかと思います。堤長発は昌平坂学問所という東大の前身の学校でも学んだ人で、優秀で人格的にも模範となり得る先生だったでしょう。この師弟関係は一生続きます。

十次の父親石井万吉は、高鍋藩の下級武士です。下級武士というのは、百姓をしながら御城のお勤めをするという身分です。典型的な日本男児で働き者で、西南戦争では西郷軍について参戦するなど義理人情に厚い武士です。母親は、乃婦子と言いまして、今の言葉を使えば福祉の心に満ち溢れた女性でした。その頃社会も不安定で、隣近所に親を亡くした子どもや貧しい家庭もありました。母親は、そういう家庭に出掛けて行つては襖障子を開けて金品を置いてあげたり、親のない子がいれば我が子のように世話をしあげたりしていたようです。

有名なエピソード「縄の帯の話」が残っております。十次が七才くらいの時の秋祭りの日のことです。母親は、夜なべをして新しい帯を作つてあげ、それを締めて十次はお祭りに出かけていきます。今は日本も豊かになりましたして買い物に行く度に色々と子どもたちは買ってもらっていますが、当時はお盆か正月かお祭りの時ぐらいしかプレゼントはもらえません。

神社の境内に行きますと、友達のまっちゃんが皆から取り囲まれていじめられています。何事かと思つて近寄ってみると、ぼろの浴衣の上から縄の帯を締めて遊びにきており、皆からかわれていたわけです。十次は勇気を出してそのいじめを止めさせます。普通の話であればそれで終わるのですが、どういふわけか十次は自分の

帯を解いてまっちゃんの縄の帯と交換してしまいます。なぜそんなことまでやってしまったのか。

先程も話したように、母親は日頃から口先ではなく行動で物で、困った人達を助けるということを常に実践していました。十次は母親の後姿を常に見ていますので、おそらく、幼心にこの目の前のまっちゃんを助けるということは、自分の何かを差し出すということなのだと思感的に考えたのでしょうか。出す物があるとすれば帯しかないわけです。浴衣の中はすっぽんぽん、下は草履しか履いていません。

問題はその後で、今度は十次が縄の帯を締めることになったわけですから、彼としては親に叱られるかもしれないという気持ちで恐る恐る家に帰ったわけです。そうしましたら、なんと母親は「お前、いいことをしたね」と誉めてくれたのです。『明倫堂』で人格を学び、母親に心を育てられたと解釈することもできます。

今の話だけを聞いてみると、石井十次は生まれながらにして心やさしい少年で理想的にスクスクと育っていったと思われがちですが、決してそうではありませんでした。彼は、非常に早熟な少年で、西南戦争に参戦した父親の後姿も見えていますので、西郷隆盛を崇拜していました。明治十二年（一八七九）十四才の時に、東京の攻玉社という学校に入ります。攻玉社という学校は現在でも残っているようですが、当時は軍人を養成する学校で旧薩摩藩からの入学者が多かったようです。今は「慶應か早稲田か」ですが、当時は「慶應か攻玉社か」で、「慶應の白足袋、攻玉社の破れ袴」と言われ蛮力ラを特徴としていました。日清、日露戦争で活躍した軍人さんの多くが攻玉社出身とか。卒業生に鈴木貫太郎、松方幸次郎、片山潜等がいます。十次はそういうところに入学した。軍人になって世のため人のために頑張ろうと考えたのであろうと思います。

ところが、一年足らずで健康を害して退学し宮崎に帰ってきてます。今度は、日南の飢肥で養蚕の勉強をしようと考え、行く途中に

宮崎に泊まった時、友達と酒を飲みながら政治談議をします。政治家の岩倉具視の悪口を言いましたら、その時のメモが警察の目に止まり、暗殺の計画を立てていると疑われて鹿児島島の監獄に五十日間ほど収監されます。しかし不幸中の幸いと言いますか、そこで西南戦争に参戦した若者と出会い西郷隆盛の話を聞き共鳴、出所後、故郷で吉野村開墾のまね事をやってみたりします。しかし、失敗。その後、学校の先生をやってみたり警察官をやってみたりします。結婚は十六才です。

警察官をやっている時です。攻玉社時代の友人の妹が宮崎の遊郭で働いていることを知り、その救済に奔走します。結果的には救い出すのですが、どういう訳か十次自身が性病にかかってしまい医者に通うことになります。その医者が高鍋出身の萩原百々平でした。萩原にはキリスト教に対する理解もあり、十次を叱咤激励、岡山医学校へ進学する事を勧めます。そして十次は岡山へ行くことを決意します。

二 石井に根付いた精神文化

明治十五年（一八八二）、十次は岡山の医学校（今の岡山大学医学部）に入学します。しかし血の多い青年ですのてなかなか自己コントロールができません。彼は十四・五才頃から日記を付けていましたが、その日記に「自戒」と「自規」、それぞれ十五箇条ほど書き並べます。それを守ろうと努力することで自分をコントロールしようとしたのです。いくつか紹介させていただきます。

「自戒」の第一条が「人と言語を交ゆ可らず」。人としやべるなどいうことです。もちろん何もしやべるなどいうことでは無く、無駄話はするなということでしょう。十七才の医学生です。とにかく一生懸命勉強して試験に合格していかなければならない。第二条「痛く節儉を守る可し慳慳^{けんけん}を伏す可し」。節約を厳しく守れ、しかしケ

チにはなるなということでしょう。第三条は「謙讓以つて驕傲に克つ可し」。謙虚な気持ちで驕り高ぶる気持ちに勝てということ。若いときにちよつと誉められたりすると舞い上がってしまい奢り傲慢になってしまいますが、謙遜であれと自らを戒めているのです。第四条が十次らしいのですが、「色欲を絶ち以て色迷に克つ可し」。性的なコントロールをしっかりしようということです。第五条は「含忍以て忿怒に克つ可し」。含忍というのは耐えるということでしょうか。忿怒は怒り。思春期には大したことでもないのにイライラしたり腹が立つたりすることがあります。そういう時にはじつと耐えよ我慢しろということです。今の若者にはこのような自戒は存在しませんので、腹が立つたらずナイフやバットを持って立ち向かっていくので、不幸な事件となつてしまいます。第六条は「淡泊以て飲食の迷ひに克つ可し」。第七条は「仁愛以て嫉妬に克つ可し」。これは重要な言葉です。仁愛という言葉は、現在では死語になつてしまいました。復活させたい言葉です。人間だれしも嫉妬心は持っています。あこがれている女性が皆からチャホヤされているのを見ると、ムラムラと怒りの感情が込み上げてくる、これが嫉妬心です。これは人間として自然な感情です。十次もこれを否定しない。否定することは人間性を否定することになります。そういう感情に仁愛の気持ちで勝とうと言っているのです。すばらしい自戒であると思います。そのような自戒が第十五条まで並んでいます。

「自規」については、毎日曜日には必ずその週に行うべき事業及び日課表、時間表を作り、思言行が一致するようにしろとか、毎日一度必ず室内を掃除しろとか、学校においては総じて其の規則ならびに先生の命令に従うべしとか、自らのルールを決めて実行しようとしています。これも十六条ほど並んでいます。

十七才くらいの若者が、このような言葉を簡単に思いつくはずがありません。なにか模範になったものがあつたはずだと考え、あれこれ探していましたが、その一つが『明倫堂』の校則であると考え

るようになりました。『明倫堂』には十八ヶ条にわたる「明倫堂学規」という校則がありました。今校則と言いますと、子どもの自主性を損なうもの、人権を束縛する悪いもののように捉えられがちですが、当時は人間が生きていくにおいて大切な知恵を教えていたわけです。

「明倫堂学規」の第一条は「入学必ず制あり」。入学したら必ずルールがありますよというのが第一条です。それに補足説明がついていて、**「明倫堂」に学ぼうとする者はまず父兄の許しを受け、礼服をつけて、師範の家に行き入学を乞う。幼年の者は父兄が同伴する云々と書いてあります。「まず父兄の許しを受け」というところに注目していただきたいのですが、今の時代感覚から言えば、校則ですから「親の許しを受けて」など書く必要はない。なぜそのように書いているのか。**

話が脱線していきますが、山口県萩に吉田松陰の『松下村塾』があります。私の勤めている児童養護施設「石井記念友愛園」では、毎年春休みに、高校生達と一緒に二泊三日の旅行に行きます。高校生達がリーダーとしての自覚を持つようにという願を込めて「高校生自覚旅行」という名前がついています。三年に一回は必ずこの『松下村塾』を訪ねるようにしています。この『松下村塾』にも塾則がありまして、第一条は「両親の命には必ず背くべからず」で、第二条は「両親には出入りを告ぐべし」です。塾則ですから現代の感覚から言えば、親のことをアレコレ言う必要はないわけです。

「明倫堂学規」や『松下村塾』の塾則に、なぜ親の許しを受けよとか親の命に背くなというようなことを書かねばならないのか。おそらく我々の先人達は、学ぶにおいてまず必要なことは親への敬いであるということをおしやうとしたのであろうと思います。約二千五百年前の孔子も次のように言っています。「入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹みて信、汎く衆を愛して仁に親づき、行いて余力あれば則ち以て文を学ぶ」。今日本全国の学校の中で、校則の中

に「入りては則ち孝」をかかげている学校がどれだけあるでしょうか。おそらく皆無でしょう。

「明倫堂学規」には、親への敬意とか、挨拶、礼儀、身だしなみ等いろいろ書いてあります。もちろん親からのしつけや愛情もあるのですが、こういうような規範を少年時代徹底的に叩き込まれたにちがいない。そういったものが十次の心の中に人格や感性として定着して、先程の自分自身の自戒自規として結晶したのでしょう。

模範となるものとしても一つ取り上げておきたいと思います。高鍋藩主秋月種茂が作った「高鍋藩士規」というのがあります。これは高鍋藩士、つまり高鍋の武士たちの生活心得みたいなものです。十何力条にわたって書き並べてあります。例えば「老人を敬うべし」、「益友を求め」よ、「万づ儉約を用ふべし」などの言葉が並んでいます。また、災難があつた時には、身分を問わず助け合えというようなことも書いてあります。また、この「高鍋藩士規」の庶民版として「郷閭学規」というものもありました。内容は同じようなものですが、文字の読めない人達を集めて庄屋さんが読んで聞かせたということです。

戦後教育が戦前の軍国主義への反動からか、歴史や文化を軽視するようになり、学力だけで人間が自立するかのごとくとらえられがちですが、こうして石井十次の少年時代を見ると、その心や人格をつくるその土地の精神文化の重要性に気づかれます。その後十次は、十九才の時キリスト教に出会いクリスチャンとなり、彼の心の世界は飛躍的に広がっていくことになります。

三 孤児教育への転身

明治二十年（一八八七）、医学の勉強も進み卒業まであと一年という時、岡山県の上阿知村の診療所で実習をすることになります。その診療所の隣には弘法大師をお祭りする御堂があり、巡礼者がよ

く寝泊りしていたのですが、そこで貧しい子連れの女性に出会います。この女性、ある村でお百姓をしていたのですが破産、家族五人で四国巡礼の旅に出て、小豆島で旦那と子ども一人を病気で失ってしまします。昼間は物乞いをし、夜はこのような御堂に身を寄せながら元の村を目指して帰る途中でした。十次はこの女性からの依頼で、連れていた少年一人を預かることになります。これが救済事業のきっかけになるのです。

彼は医学生ですので、試験に合格するために勉強に集中しなければならぬ非常に大切な時でした。なぜそういう時に少年を預かってしまったのか。普通なら「お母さん大変だね。わたしはお母さんに同情もするし助けてあげたいと思う。しかし、学生の身分であるし、預かるわけにはいかないよ。」とでも言って逃げてよかった。おそらく彼は自分の母親の後姿を思い出したに違いない。「縄の帯の話」の時と同じように、母親は、そういう人達をみたら助けてあげていた、だから自分も助けない訳にはいかないと考えたのであろうと思います。また、さきほどの「高鍋藩士規」の災難があつた時には身分を問わず助け合えという言葉も思い出したに違いない。さらにキリスト教徒としての使命感もあつたことでしょう。

学生の身分であるにもかかわらず、その少年を預かって岡山に帰り、医学の勉強をしながら面倒を見るといふ生活に入っていきます。

ところが子どもの数は徐々に増えていきます。十人二十人という数になると、食べさせるために資金を集めるという仕事の主になり、医学の勉強どころではなくなっていく。彼なりに悩みますが、出した結論はこうです。医者だったら自分でなくてもだれでもやれる。しかし、こういう孤児や貧児の養育・教育は自分しかできない。彼の性格は、猪突猛進ですので、そう決めたらじっとしておれない。今まで学んだ医書類を全部庭に投げ捨てて、石油をかけて燃やしてしまったのです。その時、妻の品子は嘆き悲しんだそうです。今でも医者になるということは名誉も地位も財産も約束されたようなも

のです。妻なりの夢を描いていたのかもしれませんが。しかし、すぐに妻品子は彼にとって最大の理解者となり、全てを救済事業にかかげつくして、わずか三十才でこの世を去ることになります。

その後、医学校も退学し本格的に救済事業に入っていきます。この時、明治二十二年（一八八九）、二十三才の時です。その後の展開にはいくつかの節目があり、子どもの数もどんどん増えていきます。

四 救済事業の展開

最初の大きな節目が、明治二十四年（一八九一）の濃尾震災時の救済活動です。名古屋地方が大地震に見舞われ七千人くらいの方が亡くなります。この時石井はすぐに名古屋に行き救済活動をしています。最初は岡山に子ども達を送っていたのですが、途中から止めて、名古屋に「震災孤児院」を作っています。なぜそうしたかと言うと、当時キリスト教に対する理解が低くて、「ヤソが子どもの生き血を集めて吸っている」というような噂が立ったためです。カソリックでブドウ酒を飲むのを見ていて、血を飲んでいると誤解したことからでた噂でしょう。

二番目の大きな節目が、明治三十七年（一九〇五）の日露戦争の戦災児救済です。そして三番目の節目が明治三十八年秋の東北地方の冷害時の救済活動です。昔は冷害が東北地方を度々襲ったようですが、この明治三十八年の冷害は想像を絶するほどのもので、米がほとんどとれない（平年作に比べて、宮城一割三分、福島二割四分、岩手三割四分）。農家の人達は、草の根本の実を食べつくし、家財道具を売り払って生き延びようとしていました。記録によりますと、何もかにも売り払い着るものがなく、藁を身に巻き付けるようにして生きている人もいたようです。最後の手段は口減らしです。

当時のお金で三円五円という値段で子ども達を売ったのです。人

身売買はけしからんと今の人達は皆思うでしょう。しかし、子ども達は売られた先で食べさせてもらえる、残った家族はそのお金で食べられる、生き延びるためのぎりぎりの選択でもあったのです。そうしなければ、餓死を待つしかない。

明治三十九年（一九〇六）の年が明けて、一刻の猶予も許されない状況となり、多くの人達が救済に動き始めます。石井はまず二月に東北三県（宮城、福島、岩手）を視察と支援体制作りのために回り、三月から五月にかけて六回に分けて計八百二十五名の子ども達を救出したのです。この救済活動に誘発されるように、東北地方にいくつかの孤児院も当時できています。

東北地方からの孤児・貧児が加わったことにより、岡山孤児院の児童数は千二百人に膨れ上がりました。それ以外に百人の職員を加えて一つの村ができたと言ってもよいでしょう。宮崎県内で言えば西米良村の人口に匹敵します。当時の一カ月の生活費は、五円かかったと言われています。今のお金で五万円と換算しますと、一カ月六万円必要ということになります。ほぼ寄付で集めるわけですから大変です。大変な事業であつたことが分かります。

彼はその後、宮崎県の茶臼原に移住します。直接のきっかけは明治二十七年（一八九四）のルソーの「エミール」との出会いです。土地は明治二十年岡山で救済事業を始めたころから確保していますので、将来何かをやるうという構想はもっていたようですが、この「エミール」を彼なりに解釈することで行動が始まります。「エミール」の英訳本を二百数十日間、英語のできる職員に訳読してもらい勉強し、神がエミール教育を実現するために自分をこの世に遣わしたのだと思うようになります。自然教育、農業教育に高めていき、子ども達とともに茶臼原の大地を開墾し、ゆくゆくは農家として独立させよう、そしてさらに新しく出た孤児はその独立した農家に預けようと考えようになるのです。今、脱施設化とかノーマライゼーションなどという言葉が福祉の最先端の思想だと言われている

ますが、石井十次は、明治時代にすでに構想していたのです。移住は明治二十七年に始まりましたが、その後、妻を病気で亡く



写真2 岡山孤児院児童

したり移住の途中で子ども達を赤痢で亡くしたりして一時中断。しかし明治三十八年（一九〇五）から再挑戦し明治の末期には里子を

残してほぼ全員の移住を終えます。理想郷づくりが本格的に始まるかに見えたのですが、石井は、大正三年（一九一四）、四十八才で

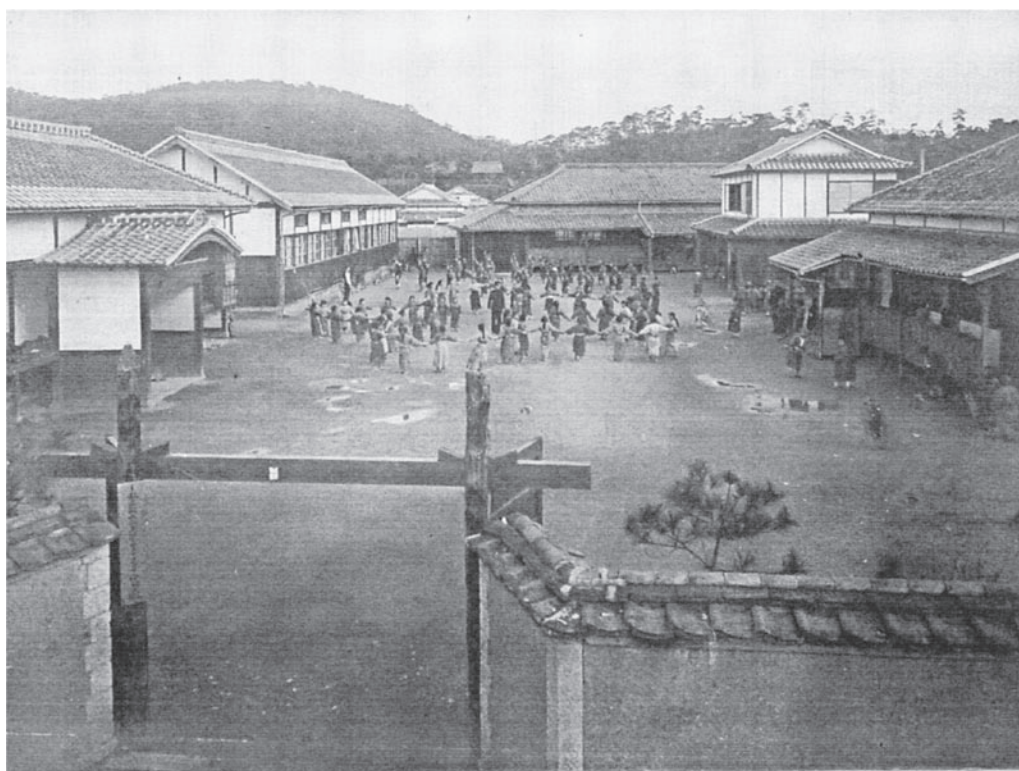


写真3 岡山孤児院尋常小学校

倒れます。

石井十次を失った岡山孤児院は、後継者にも恵まれずまた経済的

にも行き詰まり大正十五年（一九二六）解散してしまいます。石井が描いた茶臼原の理想郷作りは、幻に終わってしまったのです。

その後の展開について話しておきますと、ちょうど二十年の開鎖状態の後に、昭和二十年（一九四五）、太平洋戦争戦災孤児救済を目的として、今度は「石井記念友愛社」として事業が再開されています。

五 石井十次の教育

「岡山孤児院」という名前は、最初は俗称です。石井十次が最初につけた名前は「孤児教育会」でした。「岡山孤児院」は牧師の阿部磯雄が「基督教新聞」で紹介するために使いそれが定着したものだということになっています。「岡山孤児院」の方が分かりやすく寄付金も集めやすいということだったのでしょう。

石井十次は教育に強い関心を持っていました。だから「教育会」なのです。教育に対して目を開かせたのが、新島襄の同志社大学設立趣意書「同志社設立の始末」です。明治十七年（一八八四）夏、帰郷する途中船中で読んだその設立趣意書に多いに感動し、教育に目覚めます。彼は故郷に帰ると早速「馬場原教育会」を組織し、苦学生のために教育の機会を作ろうとします。「吾村子弟の現今年齢中にありて、他日有為の見込みあり、しかしながら家政困難其の志を達する能わざる者を助け、一は之を他国に遊学せしめ一は之を埒原朝晩学校に寄宿せしめ、或は高鍋、或は上江小学校に通学せしめ」云々とその「趣意書」に記しています。この教育会は岡山の「教育会」が設立するまで続いており、岡山孤児院の起源とすることもできます。岡山孤児院が他の追隨を許さない所は、単にその収容児数が多いということだけではなく、教育が核になり幅広くその自立のためのニーズに答えようとしたという点にあるでしょう。石井は、「孤児教育院にして養育院にあらず」とも言っています。

明治三十年（一八九七）、私立岡山孤児院尋常高等小学校を設立、優秀な児童は中学校や女学校にも進学させました。また、宮崎茶臼原移転後も茶臼原に私立茶臼原尋常高等小学校を設立（認可は大正二年）。

教育の各論については、後に岡山孤児院十二則という形でまとめられていますので、そのいくつかを紹介させていただきます。

まず家族制度。石井は、子ども達を指導する時、一人の保育士に十数名の子ども達を担当させ、一軒の家で家族的に処遇をさせるという方法をとっています。これはイギリスのバーナードホームの処遇方法を取り入れたものです。軍隊教育が一般的な時代で集団処遇でも何等違和感はなかったのですが、ここが石井十次の先駆性です。最初明治二十六年（一八九三）にバーナード報告書を手に入れた山室軍平から資料をもらい一カ月勉強してすぐ採用。明治四十年

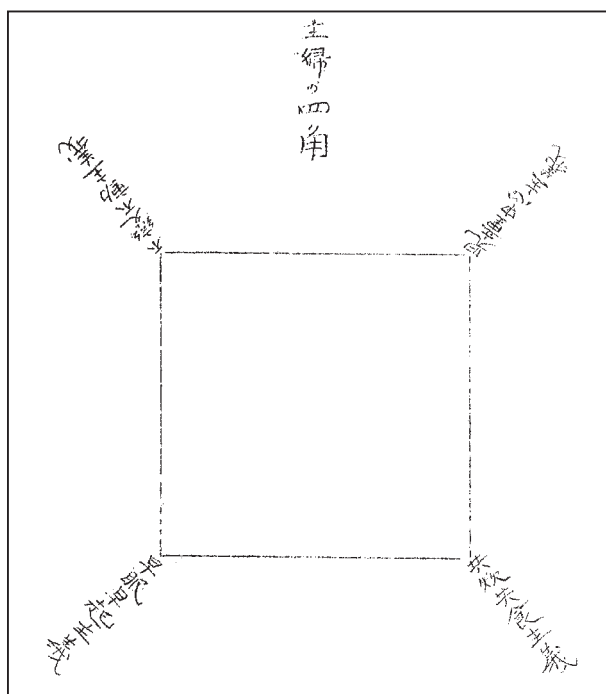


図1 主婦の四角



写真4 女子部一家庭に於ける食事

(一九〇七)には全院に家族制度を施行しています。その保育士を採用する時の話ですが、彼は一枚の紙を渡します。真中に正方形の図形が描いてあり、その上に「主婦の四角」と書いてあります。この四角には資格という意味が含まれているのです。

主婦というのは保育士のことです。そして四角の一つの角ごとに文字が記入されています。右の上が児童中心主義。厚生労働省が福祉行政の中で利用者中心主義を掲げることができたのは、高齢者福祉を整備する時でした。戦後五十年かかっています。児童の権利さえ存在しない明治の時代に「児童中心主義」とは画期的なことでした。右の下が共炊共食主義。そのまま左に移って早眠早起主義。今、文部科学省が学校で一生懸命先生達に言わせている言葉をご存じでしょうか。「早寝早起き朝御飯」です。戦後六十五年ほど経って、ようやく文部科学省が石井十次の考えに一部到達したとも言えるでしょう。最後が不変不動主義。庭に立つ松の木ように不変不動の気持ちで子供達に尽くせ、というような意味でしょう。

次に委託制度。これは今の里親制度のことです。これもバーナードホームから学んだものですが、最初に試みたのは明治三十八年(一九〇五)で、成績が良かったので、漸次数を増やし、明治四十年(一九〇七)には委託児(里子)の数が二百十六名に達しています。今宮崎県全体で里子の数は五十五名程度です。残念ながら岡山孤児院の委託制度は解散とともに消滅し、日本の社会に定着することはありませんでした。もし国がこの岡山孤児院の試みを制度として継承していれば、日本の児童福祉は今とは随分違った展開となっていたでしょう。石井は宮崎茶臼原で里親村を開く構想を持っていましたが、次のようにも書いています。「二百人位の孤児を百戸の独立農家で養育するようになったら岡山孤児院が無くなっても天下の孤児は理想的に養われ教育されて行くようになる」。

実行主義。ある時、女性職員(保育士)が石井の所に来て言います。子ども達にアレコレ指導するけれどもなかなか言うことを聞いてくれない。しかし、自分がやって見せたら言う通りにした。石井はそれはいい話だということで、実行主義と名付けます。子どもは言うようにはせず、するようになる、ということです。

米洗い教育。造り酒屋では、お酒を造る時大量に米を使う。いち

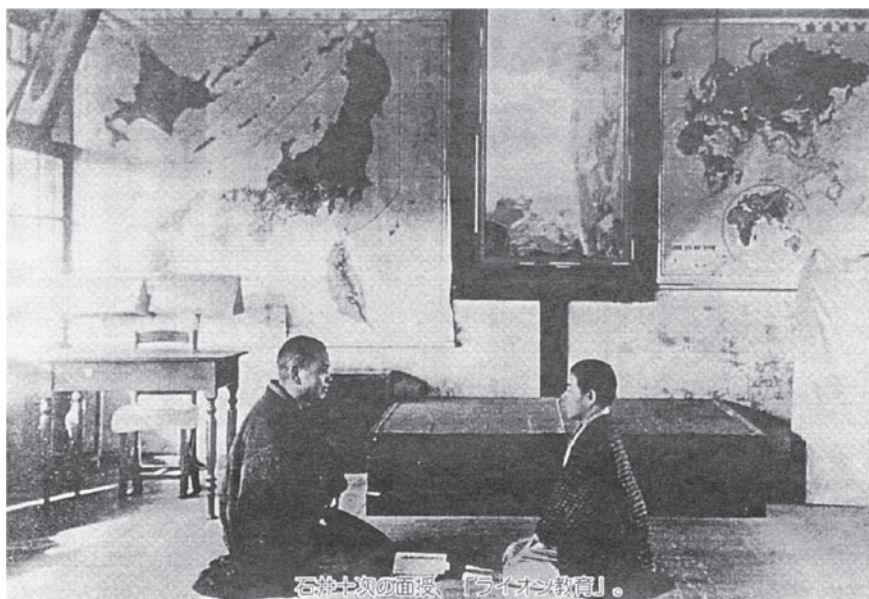


写真5 「ライオン教育」

いち桶に入れて洗っていては間に合わないの、底の浅い大きなザルに薄く米をのぼして水をかけて洗うそうです。一回二回程度では汚れは洗い落ちないけれども、何回も水をかけているうちに米は光り輝くようになるそうです。何の事を言っているのかというと、朝の朝礼です。子ども達に対して、一回二回話をしても右の耳から入って左に抜けるだけ。大事なことは繰り返し話さないということです。

密室教育。言葉は暗いですが、今で言うカウンセリングでしょう。

「不善を戒むるに公の所に於てすれば却って反動心を助長せしむ。」と説明しています。昔、私も現場で失敗しましたが、例えば盗みをした子を皆の前で叱る。他の子供達に対してこういうことはするなと言っているが、目の前の子のプライドは頭の中に入っていない。この密室教育の場面だという写真も残っ

ています。石井十次が少年と対座している写真です。

この写真は「ライオン教育」の場面でもあります。少し説明します。石井と少年が向かい合って正座している。注目していただきたいのは、二人のバックです。真ん中に藤島武二の描いた大きな絵が掲げてあります。中国に獅子が千尋（せんじん）の谷に我が子を突き落とすという古い話がありますが、その場面を描いた絵です。ここでは獅子がライオンになっていますが、谷の上から両親が見下ろし、下では子供ライオンが空ろな眼でいます。この絵の両側には日本地図と世界地図が掲げてあります。その全体を写した写真です。で、それなりの意味があるのです。どう解釈するか。

千尋の谷の一般的な説明は、獅子は子を生んだら崖から突き落し、這い上がってきた子だけを育てるということになっていますが、おそらく石井はそういう解釈ではないでしょう。これは私の想像を交えた説明です。動物の世界では、親は子を生んだら無条件に受け入れて育てます。敵が来たら体を張って子を守ろうとするし、親はガリガリに痩せても子にミルクを与えようとします。しかし、子が成長し自立の時が来たら、態度を豹変し突き放しにかかります。弱肉強食の世界ではそうしないと生きていけないのです。いつまでも親に甘えてたら自分自身の力で食糧を獲得できなくなり、すぐに他の動物の餌になってしまいます。この絵は、まさに自立の時を描いたものであると思います。石井はおそらく次のように言っている。「君は近々自立するけれども、自立するとはこういうことなんだよ。崖から突き落とされることなんだ。困った時は助けてあげるけれども、這い上がるのは君自身なんだ。這い上がる力は、岡山孤児院の教育で十分身に付けたので心配するな。しかし、しっかり自覚しろよ。それだけでなく、日本、いや世界を視野に入れて心を広くもって頑張って生きていけ」。石井はなぜこのような写真を残したのか。おそらく彼なりに後世の私たちにアピールしようとしたのではないか。教育の神髄とはこういうことなのだと。

実業教育。明治二十五年（一八九二）頃、石井は東京のある福祉施設を見学します。その施設は当時としては進んでいると言われた施設です。しかしその施設に入ってみたら入所者達は広い部屋でゴロゴロしています。そして御飯の合図の鐘がカンカンと鳴りましたら、皆バツと飛び起き我先に食堂に集まってきて、御飯をむさぼり食べる。食べ終わるとまた部屋に帰って何もしない。石井はその様子を見て愕然としたそうです。これは人間としての尊厳をもった生き物ではない、動物と一緒に考えるわけです。こんな動物みたいな人間を育ててはいけないと思い、石井は岡山に帰ってそれまでもやってはいたのですが、実業教育を本格的に授けるようになるのです。自分達で少しでも働いて自立の精神を養うという教育です。今福祉の世界では「自立」という言葉をよく使うようになりましたが、使い始めたのはこの十年くらい前からではないでしょうか。それまでの日本の戦後の福祉は、公が恵み与えるものであったのです。

他の十二則については、省略させていただきます。今までの説明でお感じになられたと思いますが、石井十次は西洋の進んだ教育理念や技術を積極的に取り入れています。しかし、かぶれてしまわないという所が彼の特徴です。例えばイギリスのバーナードホームから多くを学んでいます。しかし職員をイギリスに派遣して研修させたわけではなく、指導した教員は、それまで自分達が身につけてきた日本の確たる精神文化・生活文化に基づいて指導したわけです。内村鑑三が武士道にキリスト教を接ぎ木するというようなことを言っています。まさにそのような教育がなされた訳です。

石井が最後に到達した教育論が「三代教育論」と言って良いでしょう。彼は最初の頃は、教育の力を盲信していて、一代にして有用な人物に育て上げてみせるという勇ましい教育観をもっていたのです。ですから子どもに対する期待も非常に高かった。期待が高ければ高いほど要求も多くなるし指導も厳しくなる。しかし世の中はそんなに甘くはないわけです。子どもの持っている能力、資質、生育

環境等いろんな条件が加味されているので、なかなか思うようにには育ってくれない。社会に出てからの偏見や差別もある。そこで到達したのがこの三代教育論です。「親は働き、子は学べ、三代目には小作人が地主となる」と説明しています。まず世の中に迷惑をかけない一生懸命働く子どもを育てよう。そういう子どもを社会に自立させれば、やがて真面目に働いて結婚するだろう。子どもが生まれたら教育も授けるだろう。そして三代目にして理想的な人物ができるのである、という意味です。教育は百年の大計と言いますが、まさにそういうことだと思います。

私も若い時は随分失敗しましたが、この言葉に一番助けられたような気がします。子どもの能力、資質、生育歴等を見無視して、何とか早く子どもが抱えている問題を改善し、一人前にしたいと願う。だから、期待もどんどん高くなり、結局可能性をつぶしてしまう。戦後の教育も教育の力を盲信してしまった所があるのかもしれない。

おわりに

石井が最後に残した言葉に「天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ 相愛すべきこと」があります。大正二年（一九一三）亡くなる一年前に作った「茶臼原憲法」の第一条です。この言葉と同じことを言っている人が西郷隆盛です。「敬天愛人」です。さらに同じ九州人の福沢諭吉も「天は人の上に人を造らず 人の下に人を造らず」と言っています。石井十次、西郷隆盛、福沢諭吉のどの言葉にも「天」という言葉がついています。宗教は違っても同じような感性が彼らの中に地下水脈のように流れている。

今、二トと呼ばれる若者が六十数万人から百万人いると言われています。働こうともしない、働くための訓練を受けようとしな

べたら高い学力を有しながら、社会で自立できない若者がどんどん増えている。地域社会や家庭も個人主義化の進行とともにその機能が弱体化してきている。物質的には豊かな社会ですが、子ども達が精神的に成長・自立しにくい社会になりつつあると言えます。

教育とは一体何なのかと問いなおすべき時に来ている。今紹介させていだいたように、石井十次が突然変異的に生まれ育ったのではなく、高鍋という町の歴史、文化、人が育てたということ、そして、石井自身も日本の長い歴史や文化に培われてきた精神文化の土壌の上に教育を構築しようとしたということを学び直す時、今後に対して、私たちは、大きなヒントを得たことになります。(講座の原稿に補筆、訂正を加える)